

北の文化

札幌市白石区の平和通に、この11月で発足3年5カ月を迎えた「就労継続支援B型事業所 こころカ・プロダクション」(通称「こプロ」という精神障害者が働く事業所があります。一軒家の半分の狭い空間にスタッフ5人、メンバー18人が働いています。皆さんは「精神障害を持つ人が働く場」と聞いて何が思い浮かぶでしょうか？

事業所を立ち上げる時、メンバーとスタッフで、「メンバー一人ひとりの力が発揮され、協力しながらできる仕事とは何なのか？」と話し合いを続けました。一人ひとりの力が発揮されるということは、どういふことか？「これまで「負」の経験とそれがちがった「病気・障害」の経験そのものが障害であり、価値あるものにならないだろうか？ そんな発想から生まれたのが「自ら情報発信するメディア事業」でした。北海道

「こころカ」の試み 鍋山 健二 こころカ・プロダクションメンバー



エフエムしろいしの生放送でパーソナリティーを務める筆者(左)

精神保健推進協会理事長の阿部幸弘が続ける市民メディアの活動も大きな要因でした。同協会が運営する「こころのリカバリー総合支援センター」(こころカ)のデイケアから発展したメディアプロダクション、ということとで命名されたのです。

最初は仕事が無く、なぜか雪まつりの市民雪像を作ったこともありましたが、最近は仕事が増え忙しくなりつつあります。仕事内容は映像の撮影・編集・取材、大学や専門職・市民に向けての精神障害の理解を深めるための出張講義、研修などの運営、SNSやメールマガジンなどの媒体を使った情報発信もしています。

「病気・障害」を財産に情報発信

す。こう説明すると「一般の職場と変わらないのではないか？」と思う方もいるかもしれません。

こプロの仕事はチームで行います。スタッフもメンバーもパソコン作業や映像撮影・編集などは素人がほとんどです。カメラにも触ったことのないメンバーが後ろと前を逆にして、まさかの「自撮り」してしまふということもあった、というのは昔の笑い話です。また、出張講義ではメンバー自身が精神障害を題材にして書いたシナリオをもとに「寸劇」を演じることもあります。大きな会場で上演した時には、リハーサルで「もっと声を張って!!」など会場担当者から熱い指導を受けることもありました。映像部門では、札幌の観光地をしりとりのしながら巡る短編作品「カメラを持って飛び出そう」が、今年開催された「東京ビデオフェスティバル2017」のアワード作品に選ばれています。

また、今年の4月からはコミュニティFM「エフエムしろいし」で、毎週火曜日15時から16時に「つながるこころラジオ」、9月からは毎週水曜日11時半から12時半まで「それゆけ！ スマイルランチ」を生

放送しています。パソコンやスマートフォンアプリからでも無料で聴くことができます。

こプロが当初から大切にしていたことは「つながり」と「共働」です。人と人とのつながりから「仕事」が生まれ、その仕事を通して出来た「つながり」から新たな仕事を創っています。一人ひとりの「強み」を活かせれば障害があってもできることはたくさんあります。リハビリテーションを受けていた時とは違った仕事への「責任感」「夢や希望」「社会的役割」が個々の成長につながっています。こプロは常に成長・進化し続けています。これからのようになっているのか、私自身も楽しみにしているところです。

なべやま・けんじ 1977年、南幌町生まれ。2016年からこプロメンバー。映像の撮影・編集、出張講義、ラジオ出演などにメンバー、スタッフと共に協力しながら働いている。詳しくは「こころカ・プロダクション」(http://www.kokopro.org/recovery.org/kokopro/)。